



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

修養しゅうようを続つづけて

人格じんかくを磨みがきましよう

今年ことし、プロ野球やきゅうセントラルリーグは広島東洋カープが
25年ねんぶりに優勝ゆうしょうしました。それも圧倒あつどうてき的な強つよさでした。
勝因しょういんとして第一だいいちにあげられているのが強きょうりょく力打線だせんです。

石井琢朗いしいたくろうコーチが選手せんしゅたちにさせたのは、まるで高校こうこう
野球やきゅうのような極きわめて基本きほんてき的な練習れんしゅうである素振すぶりでした。
キャンプ中ちゅうは毎日千回まいにち かいの素振すぶりを選手せんしゅに課かし、シーズン
中ちゅうも球場きゅうじょうの壁際かへぎわぎりぎりで行おこなう素振すぶりを徹底てつていさせ、今いまで
はそれがチームの名物めいぶつになっなっているほどです。



一流選手ならでの姿勢

素振り^{すぶり}で思い出す^{おもいだす}のは松井選手^{まついせんしゅ}とイチロー選手^{いちろうせんしゅ}です。松井選手^{まついせんしゅ}は子ども^{こども}の頃から一日^{いちにち}も休まず^{やすまず}に素振り^{すぶり}を続けた^{つづけた}そうです。ジャイアンツ^{じやうだんご}入団^{にゅうだんご}後も長嶋監督^{ながしまかんとく}の指導^{しどう}のもと素振り^{すぶり}を続けた^{つづけた}のは有名な話^{ゆうめいばなし}です。こんな話^{はなし}があります。ジャイアンツ^{じやうだんご}が日本一^{にほん}になり、チーム全員^{ぜんいん}でハワイに祝勝旅行^{しゅくしょうりょこう}に行った^い時^{とき}、松井選手^{まついせんしゅ}は元木選手^{もとぎせんしゅ}と同部屋^{どうべや}でした。元木選手^{もとぎせんしゅ}が夜遅く^{よるおそ}お酒^{さけ}を飲んで帰^{かえ}ってくると松井選手^{まついせんしゅ}の姿^{すがた}がありません。珍しく^{めずら}どこか^{どこ}に出かけているのか^{おも}と思^{おも}ったら「ブンツ、ブンツ」という音^{おと}がベランダから聞^きこえてきた^きそうです。松井選手^{まついせんしゅ}はベランダで、いつもと変わ^からぬ素振り^{すぶり}をしていた^おのです。

イチロー選手^{いちろうせんしゅ}にも素振り^{すぶり}にまつわる話^{はなし}があります。イ



チロー選手が愛工大名電高校に入学した頃、野球部員は全員寮生活でした。一年生は先輩の世話や雑用で、まともな練習ができません。それが嫌で脱走する生徒もいたそうです。そんな中、夜中に先輩が部屋を見回ると、イチロー選手の姿がありませんでした。そこで一年生全員がイチロー選手を探しにいきましたが見つかりません。みんながどうしたのだろうと心配しましたが、それから一時間経った時、イチロー選手が汗まみれで寮に帰ってきました。先輩が「一体どこに行っていたんだ」と叱責すると、イチロー選手は「陸上競技場にある幅跳び用の砂場で素振りをしていました。砂場で素振りをする時に足を取られそうになるから踏ん張るので、足腰が鍛えられて一石二鳥なんです」と答えたそうです。先輩も同級生もイチロー選手の、寝る時間を割いての素振り練習



習しゅうに感心かんしんしたそうですが、誰も真似まねはしなかったようです。

野球やきゅうにおいて素振りすぶりは基本中きほんちゅうの基本きほんです。いわば平凡へいぼんな練習れんしゅうかもしれません。しかし平凡へいぼんなことを弛たゆまず続けることによつて、非凡ひぼんな成果せいかが得えられるのだと思おもいます。

新渡戸博士の「継続心」

五千円札えんごつぱで有名ゆうめいな新渡戸稻造博士にとべいなそうはくしが著書ちよしよ『修養しゅうよう』の中なかで「決心けっしんの継続けいぞくこそが修養しゅうようの根幹こんかんである」とおっしゃっています。

「何事なにごとでも継続けいぞくすることについてはすこぶる困難こんなんがある。継続心けいぞくしんを害がいするものは、内部ないぶの心こころから発はつすることもあり、また外部がいぶより来くることもある。しかして、ともにこれに



打ち勝つことは容易ではない。途中に挫けやすい。しかし、人が大事を成すと否とは、一に懸ってこの継続にあるのだから、いかなる困難を排しても継続心を修養しなければならぬ」

「決心は九分の成就」と言います。確かに決心をすることは大事ですが、それを継続しなければ意味がありません。

新渡戸博士がドイツに留学されたとき、何冊も本を書いている高名な教授に「本を書いているときに途中で嫌になることはありませんか」と尋ねたことがあったそうです。博士は若い頃、まとまった文章を書いていると途中で止めたくなくなることがあったので、その教授に尋ねたのです。すると、教授は「私も書物を書き出して中途から先になると、嫌で嫌でたまらなくなる時がある。そん



な時はもう『中止しよう』と思うのだが、それを我慢してやると、いつしか完成するものなのだ」と言われたそうです。それを聞いて「どんな仕事でも、どんなに立派な人でも、嫌になることがあるものだ。心が挫けそうになった時、『もう一息、もう一息』と自分を鼓舞していかなければ」と悟ったということです。

新渡戸博士は継続のコツとして、一定の年限を設けてその間をまず頑張ることを勧めておられます。博士が学ばれた札幌農学校の設立者・クラーク博士は学生に「飲酒・喫煙・賭博」の三つを禁止することを誓わせました。それは、二人の保証人をつけて誓いの文を読むという厳粛なものでしたが、「在学中だけ」という期限つきでした。これに対して「在学中だけでは効果が無い」という人もありましたが、実際には、在学中に厳重に誓いを守



ることによって一生誓いを守り通した、という人もかなり多かったです。

法音寺の『今日一日の堪忍』も同じです。御開山上人は杉山先生から当初「半日の堪忍をしなさい」と言われたそうです。「半日できたら、もう半日と続けなさい」と。これが一カ月、半年、一年となり、御開山上人の生涯にわたって堪忍が守られたのです。

また博士は、決心を継続するための日常のコツとして、札幌におられた時、学生に「ここだな」という観念を持つことを教えられました。これは、何かあった時に「平生自分が修養しているところの価値が試されるのは『ここだな』と思って力を入れてやる」ということです。例えば「勉強をされていて怠け心が出たら『あっ、ここだな』と反省して、勉強に戻る。早起きすることを続けていて、



朝あさ起おきたくない時に『あつ、ここだな』と思おもって眠ねむい目めをこすって起おきる。怒ど気きが生しょうじた時ときには『ここだな』と
いいう観かん念ねんをより強つよくして怒いかりに堪たえる。しかし、怒いかりに
関かんしては、毎まい朝あさ起おきる前まえに、常つねに『今日きょうは断だんじて怒ど気きを
起おこすまい』と予よ防ぼう薬やくを飲のむようのに心こころ掛かけるなら、きざ
しかけた怒ど気きも、これを抑おさえやすくなる』と言いっておら
れます。

修しゅう養ようによつて人にん間げんの器うつわが作つくられ、そして磨みがかれていき
ます。

おおくましげのぶこ 大隈重信公の「人間の器」

最近さいきん『人にん間げんの器うつわ量りょう』といいう本ほんを読よみました。その中なかに
興きょう味み深ふかい話はなしがありました。



大正から昭和にかけて活躍した政治評論家が若い頃、ある新聞で、早稲田大学の創立者であり、後に日本の総理大臣を務めた大隈重信公を徹底的に批判しました。大得意になって、「どれだけ大隈が意気消沈しているか見てやろう」と早稲田大学を訪ねました。すると応接間に現れた大隈公はにっこり笑いながら「おお、元気にやっちやるのう」と言っていて、機嫌良くソファに腰かけ、何のわだかまりもなく話をしたそうです。

大隈公が人間の器の違いを見せたということですが、実はもともと大隈公はこういう人ではなかったのです。

「伶俐で剃刀のような人」だったそうです。くだらないと思っただ人間とは全く話をせず、選り抜いた少数のエリートとしか会わない、触れれば切れるような人だったのです。幕末維新期の著名な政治家・木戸孝允が「妖刀村



正まさのようような人間にんげんだ」と評ひやうしたほどです。

こうこういう性分しょうぶんですから、周まわりに人ひとが集あつまりません。人ひとが集あつまらなければ政治せいじ家は務つとまりません。ついに、大おお隈公くまこうよりはるかに見識けんしきも能力のうりよくも劣おとる人間にんげんが政治せいじの中ちゆう枢すうを握にぎり、政府せいふから追放ついほうされてしまいました。

それを見みていた、かつて大隈家おおくまけの居候いさうこうだった実業家じつぎやうか・五代友厚ごだいともあつし氏しが大隈公おおくまこうに手紙てがみを送おくって忠告ちゆうこくしました。

「愚説ぐせつ愚論ぐろんを聞きくべきです。一いっを聞きいて十じゅうを知しってしましまうのが閣下かくかの短所たんしょです。地位ちゐの下したの人間にんげんが、閣下かくかと少すこしでも近ちかい意見いけんを述のべたらすぐさに採用さいようすべきです。他人たにんの論ろんをほめ、採用さいようしないと徳とくは広ひろがりません。怒おこるべからずです。怒気どき怒声どせいは絶対ぜつたい禁物きんもつです。事務じむの处理しゆりは急いそぐべからずです。ゆったりとやってくたさい。進すすんで、嫌きらいな人ひととも交際こうざいするべきです」



大隈公が偉いのは、かつて居候であった人の献言を受け入れたことです。以来、訪ねてくる人間とは誰とでも会うことにし、どんな愚説愚論も終わりまで聞き、ちょっと良いと思つた提案はすぐに採用し、決して怒らず、処理を急がず、大嫌いな相手とも交際するという流儀に変えたのです。百八十度の方針転換です。この時、大隈公は五十歳を越えていました。功なり名を遂げた後です。誰でも受け入れるので、一時、大隈家の居候は百人近くになつたといひます。

また、ある日の午前中は「禁酒同盟」で協賛演説をし、午後には「酒造業組合」で記念演説をしたという伝説があるくらい、頼まれることは何でも引き受けたのです。

こうして、大正3年、第二次大隈内閣を成立させ、翌年の総選挙では立憲同志会を率いて万年与党であった政



友会を破ったのです。

この話でわかるのは、人間の器量は修養によって大きくなり、また何歳になっても変わることができるといことです。決心すれば明日からでも、いや今からでも変わることはできます。ただし、その決心を継続しなければなりません。

※『人間の器量』 福田和也著（新潮新書）

